

道北農村に於ける農業と農民の問題

—名寄市智南地域の事例から—

北 大 中 屋 紀 子
名寄短大 宇田川 順子

今回研究対象とした「智南地域」は、道内穀倉地帯の一つである上川盆地の北上約八〇Kmに位置する名寄市に属する。名寄市中心部から約九Km天塩川流域に沿つた智恵文村に隣接した谷あいの農業地域である。ここは米作北限地帯であり、小規模な畑作農が多く、輪作もできず地力の消耗が激しく、旧くから問題化している地域の一つである。ピート、馬鈴薯を中心とする畑作、ビニールハウスで野菜づくりを主とする畑作、自給的米作が加わる場合もあり、又一方 米作中心、あるいは 畑作又は米作に酪農が加わった形態、更には、酪農中心、そしてわずかな山林を持つ場合もある、という様に經營の形態は雑多である。それ故農業生産再生産のもつ問題、労働力の再生産の問題も多様である。故に問題解決の方向も混沌としているようにみえる。そこで私たちは、第一に、国の農業政策と密接し、北海道においては重要な意味を持つ総合開発行政の中でこの地域のもつ問題を把握することにした。

戦後の農業は、食糧自給、人口吸収の開拓行政下で緊急開拓を中心とした農業政策がおこなわれた。三〇年以降の高度成長期に入り、酪農振興、工業原料としての農産物の高生産性、土地改良等が唱えられ、智南地区でも小家畜をはじめ、無牛農家への貸付牛制度の実質化による小家畜+乳牛一と二頭飼養農家が続出した。(畑作の問題を放置したままで…)

そして天塩川流域綜合開発が行われたが、護岸工事にのみ限定され、冷害時の「救農工事」としての役割を果たしたにすぎなかつた。

農基法農政下の第二期北海道綜合開発期に入り貿易の自由化による農畜産物価格の低落、大規模農家の育成政策による小家畜、畑作への圧迫は著しい。パイロット事業として、丘陵地の草地化も行われてきたが、結果として経営形態の複雑化、多様化を招來した。

第二に、現段階での生産の問題を考えると開発行政とのかかわり合いの中でもつとも深刻な問題は、土地問題——農産物価格とのかかわりから生ずるものである。——即ち、土地の生産性の低下、土地拡大、資金の問題としては、資金導入の見込み、導入後の見通し等々……市場問題、水問題等にもつともよくあらわれると考えられる。

第三に以上の土地問題、資金問題の農業生産の場面での具体的現われが問題となる。特に、労働力流出のもとでの機械化のたちおくれ、人口老年化、それらが更に前述の複雑な経営形態を生み出し、今後の農業生産の行方を見失なわすことになつてゐる。同時に、このことは、健康破壊、主婦の労働過重等のこの地域での農民自身の再生産、即ち農民としての生活を維持しうるか否かの判断を更に強く迫られるということも意味するものと思われる。

私達は、ここでの実態調査を通して、今後の道北農民の問題

解明の方向を考えてゆきたい。